Henry VIII における喜劇的場面について

関　谷　武　史
（教育学部　英語研究室）

A note on the comic scenes in *Henry VIII*

Takeshi SEKIYA
(*Faculty of Education*)

Henry VIII は Shakespeare の単独作であるか，John Fletcher との合作作品であるかに関して，おおいに議論されてきた作品である．これについては，われわれは外的証拠を何1つ持ってないし，将来も持つことが出来そうもない．しかしこれはこの作品の本質的価値にも関係する重要な問題なので，これ迄の合作説，単独作説を検討した上で，自分自身の結論を以下に提出してみたい．

たまたま今日の Shakespeare のテキストの中で最高の権威を持つ The Arden Shakespeare の *Henry VIII* 担当の R. A. Foakes が合作説を支持し，*The New Cambridge* の *Henry VIII* の担当者 J. C. Maxwell が単独作を支持しているので，この両者の見解を聞くことにしよう．R. A. Foakes はその Introduction で，自説を述べる前に，従来の合作説を手際よく紹介している[1]．*Henry VIII* 合作説を最初に説えたのは J. Spedding で，1850年に書いた *Who wrote Shakespeare's Henry VIII ?* という論文の中で，彼はこの作品の中に著るしく相異する2つの文体があるとし，特に end-stopped line や行の結語の redundunt syllables の多い場を Fletcher の筆になるものと考えた．こうして彼は作品を Shakespeare の筆になる部分と Fletcher の筆になる部分とに割り振ったのである．但し，4幕については Fletcher のものにしてはそこにみられる筆力が強すぎ，Shakespeare のものにしては弱すぎるとし，第3者の手が介在していると考えた．同年 Samuel Hickson が合作説を主張し，作品のあちこちに Fletcher のものらしいリズムがみられるとし，特に哀調を帯びた場での下降調が Fletcher の詩形の特質を示していると考え，作品のかなりの部分に Fletcher の筆が加っていると主張した．彼は4幕をも Fletcher のものと断言し，それに Spedding も同意している．Hickson の割り振りは次のようである．

Prologue	Fletcher	Ⅲ.ii.1–203	Shakespeare
Ⅰ.i and ii	Shakespeare	Ⅲ.ii.204–459	Fletcher
Ⅰ.iii and iv	Fletcher	Ⅳ.i and ii	Fletcher
Ⅱ.i and ii	Fletcher	Ⅴ.i	Shakespeare
Ⅱ.iii and iv	Shakespeare	Ⅴ.ii.iii.iv.v	Fletcher
Ⅲ.i	Fletcher	Epilogue	Fletcher

Henry VIII 合作説はその後も跡を絶つことなく，その支持者達はいろいろな証拠を挙げて論じていった．いくつかの単語の語形がこの作品の中で2つの著るしく異った形で現れていることに注目し，それが Shakespeare と Fletcher の好みに呼応していると考えられた．A. C. Partridge がそれを表にしている．

	Expletive do	doth	does	hath	has	them	'em	ye
Shakespeare's Part	45	2	10	22	14	23	5	1
Fletcher's Part	5	0	6	2	33	7	59	72

従来の合作説を紹介した後で，Foakes は，それに検討を加え反論している[2]．Shakespeare は後期の作品になるにつれて double-endings を多用するようになった．従って end-stopped line も多くなってきたのは当然である．Fletcher が好んだ語及び語形も，彼の好みに限ったものではなくてその時代の作家全てによって用いられたものであった．上の表で示されている Ye と 'em の Fletcher による多用も個々の場に当っていくと矛盾が生じてくる．例えば，Fletcher のものとされている4幕1場では You が12回出てくるのに Ye は3回しか出て来ないといった具合である．Foakes は植字工の介在ということもあるのではないかと述べている．2幕4場，3幕1場，同2場で Wol(s)，Car(d) とそれぞれの人物が表記されているのは植字工の癖と考えるより他にない．何故なら上記の場は，2幕4場は Shakespeare，3幕1場は Fletcher 同2場は Shakespeare と Fletcher 両者の手になるものとされているからである．Foakes は素材とその扱いの点からしても合作とは到底考えられないとしている．この作品は Holinshed や John Foxe の *Chronicles* を材料としている．作者はこれら素材の中に広範囲に散らばっている事件を1つの場に凝縮したり，改変したり，年代順を変更したり縮少したりしている．その巧妙さと変更，縮少の意図に気付くと，全く同一の意図，全く同一の注意力を持って材料を扱う2人が存在しない限りこのような作品の合作は不可能である．更に，Foakes はこの作品全体を流れる心象に注目して合作説を否定している．特に戦闘の場面もなくいわば静的なこの作品に動きを添えている身体の動きの心象が有効に使われている．しかもそれが，やはり重要な心象であるところの病気のそれと有機的関連を保っている．この事は1人の作者によらなければ不可能である．以上のように述べた後で，Foakes は，どうしても Fletcher の筆が加わっていると考えねばならないとしても，彼の関係した場は合作説支持者達によって割り振られた場よりはるかに少かったであろう，彼は恐らく1つか2つの場を仕上げたか改めたかであっただろうと結論している．

一方 J. C. Maxwell は，*Henry VIII* 合作説が *Henry VI* の場合と違って，Fletcher の文体の特色というものについての具体的検討の上に立つものであることに信頼を寄せ，更に今世紀の A. H. Thorndike や Ants Oras らの分析の結果が Spedding らの主張を確証づけるものであることを単に偶然として片付けてしまう訳にはいかぬとして，合作説に与している．しかし J. C. Maxwell は Shakespeare の原稿を Fletcher が完成させたとか，Fletcher の原稿を Shakespeare が完成させたとかという Spedding の意見に反対している．確かに，Shakespeare はこの頃 Stratford に引退してBeaumont と Fletcher におけるような合作は不可能であったにしても，通常の意味での合作を Fletcher として出来上ったのが *Henry VIII* であったであろうと述べている[3]．

ところで，合作説が生じてくるそもそもの原因は，この作品がいろいろな意味で統一性に欠ける印象を与えることにある．この点について多くの学者がいろいろ指摘しているが，ここに Sen Gupta が *Shakespeare's Historical Plays* の中で示している例を挙げてみよう[4]．Shakespeare は材料の中では全然関連性を持っていない王の Katharine との離婚問題と Anne に対する愛情問題を，王と Anne との出会いを年代的に早めることによって結びつけている．しかし王の心中でこの2つの問題は並存しているだけで，これら2つが浸透しあって悲劇的緊張を生むに至っていない．異ったイムパクトを混合させていく，円熟した喜劇や悲劇にみられる例の Shakespeare の力をここにみることが出来ない．Wolsey の描き方においても曖昧で不統一である．彼は失脚後，自分

が国王に対して持った忠誠心の半分を神に捧げていたらこのように神に見捨てられることはなかったであろうと述懐している．しかし，国王に対して彼がどのように仕えたのか，国王に対する忠誠心が個人的野心とどの程度重なり合ったものなのか曖昧である．彼は Katharine と対立しているけれども，Katharine が疑っているように，王の心に彼女との結婚の正当性に対する疑惑を生んだのが彼だったのかどうか，彼は本当に王と Katharine との離婚を望んでいるのかどうか，これらについての彼の態度は極めて曖昧にしか描かれていない．失脚に際しても内面の苦しみは一向に示されない．名誉ある地位を去るに当っても自分の気持ちを単々とあたかも観客の立場で語っている．Katharine の人物像においても単に忍耐の女性であることを越えて内面の悩みが外面的行動となって迸るようなドラマの人物として描かれていない．更に，この劇は中心となる筋を欠いている．確かに王は中心人物として描かれていて Buckingham を処刑し，Wolsey を追放し，Katharine と離婚し，最後には，Cranmer を救う．しかし，実際にはそうした人物が劇の前面に出てしまって，王の芝居というよりは彼らの芝居といった方が適わしい．登場人物同志の関係もぎくしゃくしてしまっている．Buckingham は生き存へていたら Katharine の危機を救ったであろう人として暗示されているのに，両者の関係は全く触れられず，Buckingham 処刑の際に Katharine はただ甲斐なく同情しているに過ぎない．博学の Cranmer は王と Anne の結婚のために奔走している筈であるのにそれについても触れられていない．Wolsey は前半で全ての事件に関与しそこで主要な役目を果しているのに最後の2幕では姿を消してしまっている．劇の前半は王と Katharine の離婚問題が中心主題であるのに後半では王と Anne との結婚がそれに変ってしまっている．最後の Cranmer を中心とする筋は作品全体から独立してしまった単なる付加物でしかない．以上のように，Sen Gupta はこの作品がわれわれに与える不統一の例を示しこれが合作説が生れるそもそもの原因であろうと述べている[5]．

さて，自分自身の目で *Henry VIII* を読み返している中に，私はそこにリズムが存在していることに気付いた．そのリズムが私の側に伝達されて意識の中に形成されると，この作品はぎくしゃくしたものであるどころか，Shakespeare の作品中でも最も統一のとれたものの1つであることを知ったのである．このリズムの存在を認識させてくれたのは作中の数少い喜劇的場面によってであった．更にこの喜劇的場面はリズムの構成に欠くことの出来ないものとして存在しているだけではなくて，作品の主題を知る上でも極めて重要と思われるので，以下に喜劇的場面を中心に作品に則しつつ分析を進めたい．

1幕1場では，イギリスとフランス両王の衣装合戦の様子が語られ，そのため庶民の生活が相当犠牲にされてしまっていることが暗示される．これらを取頻っているのが Wolsey であることが彼と鋭く対立している Buckingham の口から伝えられている．Buckingham は徳もあり誠実な人間として描かれ，国王が Wolsey の言いなりになっていることを悲しみ，国家の現状を憂いている．しかし，彼の言葉のふしぶしには肉屋の倅からのしあがってきた成り上り者に対する名門の出身者としての自負心と自分が日陰におかれてしまっている現状に対する憤まんが込められている．英国全土を揺がしたバラ戦争の終結と共に旧貴族は消滅しそれに代って Wolsey のような新興貴族の抬頭が目ざましかった当時の実状をこの対立は示している．この対立は Wolsey の策略によってあっさり幕となる．Buckingham は Wolsey に買収された部下によって裏切られロンドン塔へ送られてしまう．続く1幕2場では Katharine が登場．王の面前で財産の6分の1にも相当する高額な税の徴収について触れ，併せて Buckingham 監禁の真相を質す．Buckingham の罪はすでに Wolsey と組んでいる Buckingham の部下の監督官によって立証される．国王は税の取り立てを中止する旨の命令を出すけれども Wolsey が自分の功績によるかの如くに国民に印象づける形で処理してしまう．この2つの場を通して，われわれは Wolsey の陰険な本性を知らされる．2つの場に比べて陽性な明るい場がこれに続いている．ここでは宮内大臣と Sands 郷と Thomas Lovell 郷が

フランスかぶれの宮廷人達を揶揄し，それに迎合する婦人達と彼らの恋愛ごっこを批判している．そのくせ彼らはそうした軽薄な流行が幅を利かす仮面舞踏会へ幹事役として出席しようとしている．続く4場は王とAnneとの最初の出会いの場である．Buckinghamの失脚という重くるしい場とは対照的にAnneの輝かしい未来への出発となる王との出会いの場は実に陽気な筆致で描かれている．合作説を支持する人達は冒頭の2つの場をShakespeareの，それに続く2つの場をFletcherの筆によるものと考えている．確かに冒頭の2つの場が宮廷に巣くっている陰謀，策謀のみにくさを描いているに反して，それに続く2つの場が陽気で健康的であり，一見したところでは，両者の間に断絶が存在しているように思われる．そしてその事は合作説を確証するもののように思われる．しかし，これら両者は雰囲気こそ異ったものであれ，Buckinghamの下降とAnneの上昇を対立的に示しながら，有機的関連をなして下降上昇の人生流動の相を示している．更に注意してみると，王とAnneとの最初の出会いとなる喜劇的場にはこの舞踏会を主催しているWolseyの下降の芽が萌ている．人間の意志とは全く関係なく人間をじゅうりんしていく歴史の悪応性とでも呼ぶべきものがこの場に暗示されている．WolseyはKatharineから王の目を外らすためにAnneを利用しているに過ぎなかった．その事は次の3人の対話によって明らかとなる．

Nor.　　What's the cause?
Cham. It seems the marriage with his brother's wife
　Has crept too near another lady.
Suf. (Aside)　　No, his conscience
　Has crept too near another lady.
Nor.　　'Tis so;
　This is the cardinal's doing: the king-cardinal,
　That blind priest, like the eldest son of fortune,
　Turns what he list. The king will know him one day.
　　II. ii. 15-21.

ノオーフォーク．　　何が原因で．
宮内大臣．義理の姉上である皇后様との御結婚が，
　しきりとお心にかかる御様子でした．
サフォーク．　　〔傍白〕そうじゃない．
　心にかかるのは，もう1人の女のほうさ．
ノオーフォーク．　　そうかやはり．
　これも枢機卿の差し金だ．国王気取りの坊主め．
　身の程知らずに，運命の女神の息子面して，
　好き勝手な出しゃばりだ．いつかは化けの皮がはがれますぞ．

しかし心中では王とフランス王の妹との結婚を目論でいるWolseyは王の関心をAnneから外らそうとする結果となる．そしてそれが彼の下降の原因となり王とAnneとの結婚に寄与するCranmer上昇の動きを生むことになる．Buckinghamを抹殺し意気揚々たるWolsey，絶頂にあるかにみえる正にその時に下降の芽が育くまれていく．陽性な喜劇的場は厳粛な場と共同してリズムを構成し，この世の現実，人間の現実の相を示しているばかりか，厳粛な場を先導して，リズムを動かしていく枢軸の働きをしている．

次に喜劇的場面として描かれているのは2幕3場である．この場は1幕の3場，4場と違って，

合作説を主張する人達によって Shakespeare のものとされている．すでに引用した表にみられる証拠に基ずいてそのように定義されたものであろうけれども，ここに登場する老婦人の Anne に向けての台詞

Old L.　　Beshrew me, I would,
And venture maidenhead for't, and so would you,
For all this spice of your hypocrisy:
You that have so fair parts of woman on you,
Have too a woman's heart, which ever yet
Affected eminence, wealth, sovereignty;
Which, to say sooth, are blessings; and which gifts
(Saving your mincing) the capacity
Of your soft cheveril conscience would receive,
If you might please to stretch it.
Ⅱ. iii. 24–33.

老婦人　　あら，わたしだったら
なりますわ，2女のしるしなんかあげちゃったって．あなただって，
きっと，そう．お上品ぶってはいらっしゃるけど．
そんなにきれいで女らしい身体をしてらっしゃれば，
心もやっぱり女ですもの，玉の輿に乗りたいのは人情でしょうし，
お妃にだってなりたいはずですね．だって，
ほんとにすてきですもの．あなたさえその気なら，
もちろんつつましいお気持はわかりますけど，
心の手綱をほんのちょっとゆるめるだけで，
その仕合せが手に入りますのよ．

が *Othello* の4幕3場で Desdemona とのやりとりで示す Emilia の俗っぽい次の発言と似ていることにもよると思われる．

Des. I have heard it said so. O, these men, these men!
Dost thou in conscience think,-tell me, Emilia,-
That there be women do abuse their husbands
In such gross kind?
Emil.　　There be some such, no question.
Des, Wouldst thou do such a deed, for all the world?
Emil. Why, would not you?
Des.　　No, by this heavenly light!
Emil. Nor I neither, by this heavenly light,
I might do it as well in the dark.
Des. Wouldst thou do such a thing for all the world?
Emil. The world is a huge thing, it is a great price,
For a small vice.

Des. Good troth, I think thou wouldst not.

Emil. By my troth, I think I should, and undo't when I had done it; marry, I would not do such a thing for a joint-ring; or for measures of lawn, nor for gowns, or petticoats, nor caps, nor any such exhibition; but, for the whole world? ud's pity, who would not make her husband a cuckold, to make him a monarch? I should venture purgatory for it.

Des. Beshrew me, if I would do such a wrong,
For the whole world.

Emil. Why, the wrong is but a wrong i' the world; and having the world for your labour, 'tis a wrong in your own world, and you might quickly make it right.

Ⅳ. iii. 59-82.

デズデモーナ　だってそういうじゃないの？
ああ，男！男！
世間では自分の夫にひどい恥を
掻かせる女があるっていうけど—ねえ，エミリア—
本当かしら？
エミリア　そりゃそんなのもおりますよ，もちろん．
デズデモーナ　世界じゅうみんな貰ってもお前，そんなことできる？
エミリア　じゃ奥さまはなさいません？
デズデモーナ　しないわ，お月さまに誓って！
エミリア　わたくしだって，お月さまの前ではいたしませんね．
闇夜にたんとやれますもの．
デズデモーナ　世界を全部貰ったら，お前，そんなことするの？
エミリア　世界を全部と申したら大きなもんでございますよ．
少しくらい悪いことをしたってそれだけ貰えるんだったら
大したもんじゃございませんか？
デズデモーナ　いえ，お前はけっしてしないと思うわ．
エミリア　いいえ，わたくしはきっとやりそうですわ．その代り，
やってしまったらちゃんと後仕末をしておきますわ．ですけど
事が事なんですから，指輪やリンネルの切れっぱしや
洋服や下着や帽子や少しくらいの小遣い銭じゃ，
わたくしやりません．だけど，世界じゅうを全部って
いうんでございましょう？—そりゃ，自分の亭主を
王さまにするって段になれば，誰だって間男くらい
いたしますわよ．わたくしなら地獄に堕とすぞって
いわれたってやりますわ．

更に彼女が *Romeo and Juliet* に登場する乳母の性格と語り口に似ているところから来ているようにも思われる．

この場も前後の厳粛な場と緊密な絡りを成している．下降していく Katharine との対立の中で Anne の上昇を示す場として存在しているが，そればかりでなくこの場はこれ迄観客に曖昧にしか伝達されていない事実を明瞭化していく働きをもしている．つまり2幕2場で宮内大臣らが国王の

最近の気むずかしくふさぎこんだ様子と，国王と Katharine の離婚をめぐる Wolsey の策謀を語り，続いて国王の何かに思い悩む様子が描かれている．しかし，国王の煩悶が Katharine との結婚の正当性に関するものなのかそれとも Anne に対する恋心によるものなのか曖昧のままである．しかし，上に引用したこの2幕3場の老婦人の台詞によって，われわれは王と Anne の仲がかなり進展していることを知る．と同時に老婦人のこの台詞は Anne という女性の本質を，表面上は彼女は Katharine の不幸を悲しみ，謙虚にふるまっているけれども，彼女の中に世俗的野心が存在していることを示している．この場をしめくくる彼女の Pray do not deliver What here Y'have heard to her〔Anne〕. Ⅱ.iii.106～7.「お願いね，このことを奥様にはお話ししないでね.」という台詞が，つまり Anne には秘密に王との関係を発展させていきたいという願望の吐露されたものと考えられるこの台詞が彼女の本質を浮き彫りにしている．この世俗性が彼女を宮廷の真只中へ，歴史のうずの中へと押しやっていくのである．

王と Katharine との離婚の妨害策が露見し，更には莫大な私有財産が王の知るところとなり，Wolsey は失脚し，Cranmer が胎頭し，Wolsey の後を継いで Thomas More が大法官に起用されるといったかなり重くるしい政治の場があった後で，Anne の戴冠を告げるおおらかな喜劇的場面が描かれている．場所は Westminster 街の通り，2人の紳士が登場し Anne の行列を待っている．

1 Gent. Y'are well met once again.
2 Gent. So are you.
1 Gent. You come to kake your stand here, and behold
The Lady Anne pass from her coronation.
2 Gent. 'Tis all my business. At our last encounter
The Duke of Buckingham came from his trial.
1 Gent. 'Tis very true. But that time offer'd sorrow,
This general joy.

Ⅳ. i. 1-7.

第1の紳士　やあ，またお会いしましたね．
第2の紳士　やあ，どうも．
第1の紳士　ここで待っていて，アン皇后様が
戴冠式から戻ってくるところを見ようっていうんでしょう．
第2の紳士　そう，それでやって来たんですよ．この前のときは
バッキンガム公爵が判決をうけて，出てきたところでしたね．
第1の紳士　そうだった．あれは悲しい日でしたね．
でも今度は喜びでいっぱいですよ．

続いて彼らは Katharine が彼女の欠席のままに法廷で離婚を宣告され，今は宮廷から他へ身柄を殺され病いの床に身を置いていることを伝えている．上の台詞にも明らかなように2人は Buckingham の処刑の場にも登場している．Shakespeare の作品に散見されるパラレルとコントラストの手法が際立っている．この技法の妙によって，絶え間なく流れ来たり流れ去る人の世のうつろいゆく現実が写し出されている．やがて戴冠式を終えた Anne の1行が舞台を横切っていく．これは1幕4場の仮面舞踏会の場とか4幕2場の Katharine 臨終の幻想的場面と共に Shakespeare の晩年のロマンス劇や Beaumont & Fletcher の作品の特質の1つを成すものである．そこへ第3の紳士

が加って載冠の様子が伝達される．Anne の美しさ，彼女の身辺にみなぎる明るさが強調され，市民も唱和して歓喜の大合唱を奏している．Shakespeare は作品の中で，*Julius Caesar* と *Antony and Cleopatra* においてそれは顕著であるが，市民一般をとかく批判の目で見ているけれども，ここでは彼らは暖かな目で描かれている．この後に来る喜劇の場は5幕の4場と5場で，ここでは Anne の娘の Elizabeth の洗礼当日の出来事が描かれている．載冠式とこの場との間に Katharine の死，司教らの陰謀によってあわや破滅寸前の Cranmer が王の取り計らいで救われるといった悲しくもまた緊張した場面が介在している．この洗礼の場，5幕4場，5場にも群衆が現れ，ルネッサンスの気分あふれる実に陽光の下に照らされた英国の姿が生き生きと描かれている．終幕での Cranmer と国王との間に交わされる作品の最後を飾る台詞は，政治の世界の場の後だけにそれだけいっそう明るい英国の将来を伝えている．

Cran. She shall be, to the happiness of England,
An aged princess; many days shall see her,
And yet no day without a deed to crown it.
Would I had known no more; but she must die,
She must, the saints must have her; yet a virgin,
A most unspotted lily shall she pass
To th'ground, and all the world shall mourn her.
V. iv. 56–62.

クランマー　イギリスにとって幸いにも，このお方は
長寿を保って国事を御親裁になり，しかもなお
日々に新たに善根を施されることでありましょう．
ああ，これ以上は見たくないのです—このお方もやはり
死なねば—どうしても，聖者たちがどうしてもと言われるのです
—結婚もされず，清浄無垢の百合の花のまま，
大地に戻られるのです．世界じゅうの嘆きの声に送られて．

しかし，これらの場も単に明るいだけではない．これ迄の喜劇の場がそうであったように，意味深長な場である．なぜならば，これらの場は厳粛な暗い悲劇の場と表裏一体を成して，この世の醜さ，人間の醜さ，と同時に，歴史の仮借なき歯車によって押しつぶされていく人間の現実を示しているからである．

4幕1場で Anne 女王の載冠式のパレードを眼の前にして，2人の紳士が行列に従う面々を説明している．その時，第2の紳士の "These are stars indeed—" Ⅳ. i. 54. 「まさにきらめく星の群れといったところですね．」という言葉に第1の紳士が "And sometimes falling ones." Ⅳ. i. 55. 「それでときに堕ちるものもある．」と答えている．これは陰謀うずまく宮廷の世界の現実を皮肉に言い当てたものである．この言葉は聞く者に堕ちていった Wolsey, Katharine そして忠誠な Buckingham を想い起さずにはおかない．また Anne の載冠に対する群衆の喜びを伝える第3の紳士の

3 Gent……
Great-bellied women,
That had not half a week to go, like rams

In the old time of war, would shake the press
And make 'em reel before 'em. No man living
Could say 'This is my wife' there, all were woven
So strangely in one piece.

Ⅳ. i. 76–81.

お腹の大きい女も何人かいたのですが，
もう何日かで生れようというお腹を，昔の戦争で
城攻めに使った槌のようにつき出すと，前にいた連中が
ぐらぐら倒れかかるといった有様でした．男たちの誰1人，
これはおれの女房だ，なんて言えないくらい，皆ごっちゃに
ひとかたまりになってしまったんです．

という台詞は群象の歓喜を表現しているというよりは，王と Anne 女王との関係の淫らさを伝えているようでもある．これは5幕4場での門衛の次の台詞

Port. What should you do, but knock 'em down by th' dozens? Is this Moorfields to muster in? Or have we some strange Indian with the great tool come to court, the women so besiege us? Bless me, what a fry of fornication is at door! On my Christian conscience this one christening will beget a thousand, here will be father, godfather, and all together.

Ⅴ. iii. 31–37.

門衛　きまってるじゃねえか，どやしつけるんだ，いくらでも．ここはムアフィールドの練兵場じゃないんだぞ．それともなんだ，でっかい道具をぶら下げた変な黒ん坊でもやって来たからだってというのか，女どもがこんなに押し寄せたのは．なんてこった，色気違いどもが押しあいへしあいしやがって．今に見てろ，今日の洗礼式がもとで，千人も洗礼を受けることになるぞ．親父も名付け親もみんな揃ってるんだ．

と呼応している．また4幕1場の "And sometimes falling ones." は5幕4場の "But She must die." と重って人間の mortality を強調している．これ迄下降上昇のリズムを成して展開して来たこの作品は Anne の載冠と Elizabeth の誕生という2つの事件によって，上昇の大合唱のうちに幕となるようでいて，実は人間の mortality，歴史の悪魔性を厳然として写して終っている．これは，作品の中に存在している数少い喜劇の場面が持っている2面性によるものである．そしてこの2面性は Clifford Leech が主張しているように，John Fletcher の作品に欠如しているところの特質である[6]．このような観点に立てば，Fletcher のものとして割り振られている喜劇的な場は前後の場と相互に関連しつつ，作品全体の流れを創造していることが分る．両者の係わり方は複雑多岐に互っているため1口で説明することは困難である．ある場合には悲劇の原因を予兆するものとして存在しまたある場合には悲劇の場を透視してわれわれに裏に隠れている意味を認識させてくれるものとして存在している．また，ある場合には悲劇の場と呼応しつつ作品の中心主題を形成している．喜劇の場が持つこのような働きによって，われわれはこの作品が1貫した中心主題を持っていることを知ることが出来る．また喜劇の場の働きに注目すれば，合作説を生むそもそもの理由となった表面的欠陥も首肯出来ないものとなる．われわれは王の Anne に対する心の深まりの経緯も

はっきりと知ることが出来るし，Wolsey の野心も1貫性を持つものであることをも知ることが出来る．また，この作品のリズムの重要性に気付けば，それ迄作品の主役だった Wolsey が4幕以降ぱたりと姿を消してしまっていても，彼がこのリズムの創造に十分参与した後であるだけに不自然とは思われない．Katharine の退場についてもそれと同じことが言える．このような理由から私はこの作品が Shakespeare の単独作品であると考えたいのである．

ところで，この作品の Shakespeare 単独作説を主張する1人 G. Wilson Knight も *The Crown of Life* の中で喜劇的場面に注目している[7]．彼は，合作支持者達が Fletcher の手になる場として挙げる際の有力な証拠とした falling rhythm をその人物の conversion の現われであって，これこそ Shakespeare の文体上の妙技の1つであると主張したのである．だから，論文の題名を，*Henry VIII and The Poetry of Conversion* としている．Wilson Knight は，ロマンティックで陽気な喜劇的場面が厳粛で宗教的な場面と対置して互いの場面を盛り立てあっていると述べ両者の関連性を認めているものの，この作品は悲劇的場面において厳しさが欠けていると同様，喜劇作品にも諷刺性，皮肉性が欠けていると指摘している．そして，この作品は，*The Tempest* に至る迄昂揚して来た Puritan 的厳しさが弛緩して優しいものとなってしまっていると述べている．彼の主張を補えば，*Henry VIII* はその優しさの中で，1613年に挙行された時の王 James I の娘 Elizabeth とドイツの特別選挙候 Frederick との婚礼を祝って，同名の Elizabeth 妃の誕生を寿ぎ英国の将来をたからかにうたいあげた作品ということになる[8]．そして Buckingham や Wolsey や Katharine の死の間際の台詞は寛容と訴しと天上での至福な再生を暗示しているということになる．しかし，このような意見に疑問があることについて例を以って説明し，この作品が歴史との係りの中で残酷に踏みにじられてゆく人間の現実の相を主題としており，その残酷性が喜劇の場の働きによって，更に，いっそう強調され明瞭化されていることについて触れたつもりである．

今迄私は歴史という言葉を不用意に使用して来たと思えるので，この作品の中で歴史がどのように扱われているかについて説明しておきたく思う．作中 Buckingham は部下の裏切りによって，Katharine は Wolsey の権力欲の犠牲になって，直接には，夫の愛の裏切りによって破滅していくのであるが，彼らを破滅へと追い込むのは歴史である．つまり人間の力の及ぶ範囲をはるかに越えて存在する力として，Shakespeare は歴史というものを捉えていたと思われる．歴史劇の創作においては，彼はこの歴史を具体物に形象化している．そしてこの作品では，Heury VIII が歴史の具体化として登場していると思われる．

Henry VIII 以外の歴史劇では王は諸貴族や僧侶の支持を必要とした．それらの作品では主人公は王でも王子でもなく，彼らの上に厳然として存在する英国であった．英国国家が人間の織りなす悲劇の上に超然として存在し進行していた．英国国家が歴史の具体化されたものであった．しかしこの作品では王は絶対者として存在していた．彼が国事をとりしきっていたという意味によってばかりでなく，Buckingham も Wolsey も Katharine さえも死の間際には王の絶対性を認め絶大なる力を認めている．それは Buckingham の

Commend me to his grace,
And if he speaks of Buckingham, pray tell him
You met him half in heaven: my vows and prayers
Yet are the king's, and till my soul forsake
Shall cry for blessings on him.
II. i. 86–90.

陛下にはくれぐれもよろしくお伝え願いたい．何かの折に，

バッキンガムのことを思い出されることがあったら，あの男には
天国への階段の下で会いましたと申し上げてくれ．
今もなおわしは陛下のために祈りを捧げ，
魂が離れる最後まで陛下を祝福申し上げるつもりだ．

とか Wolsey の

Wol.　　Why well;
Never so truly happy, my good Cromwell;
I know myself now, and I feel within me
A peace above all earthly dignities,
A still and quiet conscience. The king has cur'd me,
I humbly thank his grace;
Ⅲ. ii. 376-381.

なに大丈夫だ．
こんなに仕合わせだったことはないぞ，クロムウェル，
今こそ自分が分った．おれの心の中には
この世の権勢など及びもつかない平和がある．
静かで澄みきった心境だ．陛下が救ってくれたのだ．
おれは陛下に心から礼を言いたい．

とか Katharine の死の直前の "Remember me In all humility unto his highness." Ⅳ. ii. 160～161.『陛下には心からよろしくと申し上げて下さい.』といった台詞はそういう絶大なる力に対する畏敬の念が言わせているものである．王の力は絶対でありその威厳は他を圧し，彼の存在は他の力の及ぶ範囲外にあって，しかも進行していた．それは歴史そのものの存在であった．Buckingham も Wolsey も Katharine も原因は様々であったけれども，王の進行の過程で押しつぶされていったということにおいては皆同じである．王に対する支配権を手中に持っていると自負していた Wolsey ですら結局は王の進行の1犠牲者に過ぎなかったのである．そして，牽強付会のそしりを招く恐れがあるにせよ，王の進行の過程で倒れていった人達の中に，私は，最終場面で寿がれた Anne, と英国の将来を高らかに歌い上げた Cranmer，また，ちらと Wolsey の大法官の後任に就任したことが伝えられるだけにせよ，その Thomas More を加えたいと思う．勿論この私の主張は当時の観客の脳裡にその事が存在していた筈であるという前提でのことである．これはこの作品が扱っている時代の枠外の出来事であるにせよ，一王と Katharine との離婚問題に絡む Thomas More の処刑，姦通罪による Anne の処刑という2大事件は生々しい記憶として当時の観客の頭の中に存在していた筈だからである．

さて，*Henry VIII* はこうした世の中の現実，人間の置かれている状況の現実，更には歴史の悪魔性を描いているのだが，そうした認識に立った上でわれわれはどうあればよいかという問題が依然として残る．Shakespeare がこの作品の中で追求している究極的問題はこのことに他ならない．その事は Buckingham, Wolsey, Katharine といった堕ちていった人達の最終台詞の中に暗示されている．しかし，われわれがそこに解答らしいものを求めても無駄なことのようである．彼らの台詞の中には，確かに，寛容と許しの思想が，この世での富とか名誉とかを一切取り去った上での天国での安らぎといった思想が散見されるけれども，そこに示されている寛容，許しは悟りの心

境からは程遠いもののようである．そこではむしろその事の難しさが伝えられているようである．天国での安らぎの思想も確信というよりは願望，それもはかないそれとして描かれているようである．しかしたとえそれがはかないにしても何とかそこに至る道を求めている作者の模索の姿勢はかなり強烈にこちらに伝ってくる．

従来，晩年の Shakespeare は人生の煩悶から脱した澄んだ境地にある人として捉えられて来た．しかし，この作品から，世の現実に対する，そして人間のおかれている現実に対する鋭い認識の上に立って人間の処すべき道を必死に追い求めている Shakespeare の姿が私に明らかにされるのである．この世の現実，人間の現実を生半可な楽天的人生観，宗教観と妥協させることなく，晩年に至るも尚それらの現実と鋭く対決している彼の心境をそのままに伝える作品として *Henry VIII* は私に訴えてくる．そしてその事は Fletcher との合作が確実視されている *The Two Noble Kinsmen* の中の Shakespeare の筆による部分との照合によってより明らかにされると思う．その事を私の次の課題としたいと思う．

注

1) *King Henry VIII* (New Arden Edition), Introduction, pp. XV−XX.
2) Ibid., pp. XX−XXVi.
3) *King Henry VIII*, (The New Shakespeare Edition), pp. iX−XXViii.
4) S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays*, 1966, pp. 155−161.
5) Sen Gupta は Henry 王を中心とする1貫した筋と主題とに注目して，この作品を Shakespeare の単独作であると結論している．この作品のこのような特質に気付けば表面的な読みによって生ずる欠点も消滅する筈であると考えている．
6) Clifford Leech, *The John Fletcher Plays*, 1962, pp. 147−149.
7) G. Wilson Knight, *The Crown of Life*, 1969, pp. 297−318.

* 拙論中の *Henry VIII* からの引用文に付した日本文は中野皓史氏のものをお借りしました．

(昭和53年7月20日受理)
(昭和53年12月7日発行)